

## 都市の中間空間

－目的の合間に存在する領域を情緒が動く場所へ－

21719009 浦田 南  
指導教員 細井 昭憲 准教授

道草	中間空間	目的
都市	原風景	公園

### 1 背景と目的

機能性と効率性が求められ発展を遂げた現代の都市では、目的が先行し、目的と目的の合間にあるものは無意識に排除されている。目的地に向かう道は人々の意識の中から淘汰され、街の記憶をつくる身体的な体験も同時に失われている。現実の暮らしが街の中にありながら、街と暮らしが結びつかないことに興味を抱いた事が本研究の発端である。

子どもの頃は地元の街が生活圏であり、街での体験が経験の多くを占めている。一方で大人になると生活圏は広がり、目的地は地元の街ではない事が多く、街にいる時間は家の中であることが主である。子どもの頃、街中を歩きまわっていた体験が、大人になるにつれ、街の道が目的と目的の連結にすぎなくなり失われていったと言える。本研究では、子ども時代に行っていた街での道草に着目し、現代の都市と人々の移動空間での体験について読み解いていく。本設計の建築空間での体験をもとに、人々の街に対する意識を変えるきっかけをつくることで、目的と目的の合間に存在する領域が人々の中で顕在化し、今まで見えていなかった街の風景に出会い、記憶と実感として人々の中に堆積していくことを目的とする。

### 2 道草からの考察

#### 1) 道草

本研究では、「目的の所へたどり着く途中で他の事に関わって時間を費やすこと」を道草と定義する。子どもの道草は通学路において行われることが多い。小学校では一般的に安全性に重きが置かれ、学校から自宅まで無駄がない合理的な道として選ばれた指定通学路が定められている。指定通学路から外れ道草をすることは、安全性と合理性から離れ、子ども自身の意思で道を選択していると言える。そこで選択された道は、街に対する興味や好奇心、面白さといった子供たちの自己の意識が反応する場所になっている。日々の生活を街で過ごし、道草によって街の探検が偶発的に行われる中で、子どもたちはどの道に面白いもの、遊べる場所があるのかを知り、街を把握していく。そうして子どもの頭の中には独自の街の地図が描かれていくのである。つまり、子どもたちは道草を通して、街を自分たちの目線で熟知し、自己の情緒と結びつけながら街の環境を認識しているのである。

街の地図



子どもの頭の中に描かれる地図



図1 街の地図

#### 2) 道草の喪失

大人になるにつれ、道草という体験は失われていく。また近年では子どもたちが街で道草する姿も見られなくなってきている。道草が切り捨てられてきた要因として次のことが挙げられる。まずは子どもたちのために考えられた安心安全を最優先とする動きである。1960年代から急速に進行したモータリゼーションによって道は車優先となり、同時に交通事故の死者数も増大した過去があることから、道草が安心安全に反するものとして扱われるようになったのだ。次にあげられるのは、20世紀の科学技術の発展と経済成長期を背景にうまれた効率を追求する価値観である。こうした価値観が流れる社会の中で、目的の途中で寄り道する道草は、効率とは対極のものとして見られ、必要ないものとして捉えられるようになった。社会の中の道草は危険で不必要なものであるという風潮は、無意識に個人の行動や意識に影響を与えている。

#### 3) 道草から読み解く現代の都市

機能性と効率性が求められ発展を遂げた現代の都市では、道は建物から建物へ向かうためだけの移動空間となった。そのような道の上では、人々の意識は離れたところであり、街に対して意識を持つことはもはやない。

街の中では本来、様々な光景が見られるはずである。散歩する老夫婦、ひなたぼっこする猫、落ち葉掃きのために立てかけられたほうき、暮らしや営みの風景がありふれているはずだ。しかし目的と目的の結合部に過ぎない現代の道の上では、存在するはずの風景が見えなくなっている。つまり、街の風景が時代とともに失われていったのではなく、道草のような風景に気づくための身体的な体験が、現代の都市では失われつつある。

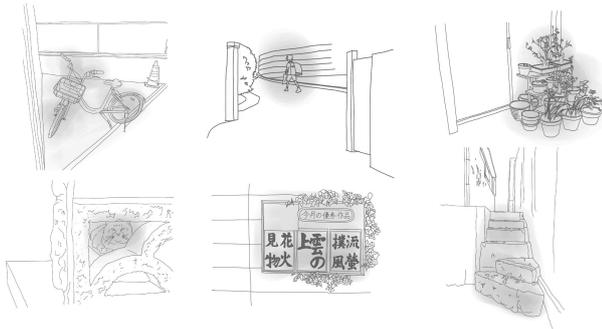


図2 見えなくなっている街の風景

### 3 中間空間と原風景

ジョン・アーリは移動によって生み出される、家、仕事、余暇・社交の「合間」にある空間を「中間空間」と呼んだ。近年は目的が先行する事が多く、目的に辿り着く過程は潰す時間として消費され、中間空間が失われている。街では、駅、コンビニといった目的の位置がマッピングされ、辿り着く過程ではイヤフォンを耳にさし自分の世界に入り込んでいる。身体は街を動いているが、自己の意識は街から切り離されているのだ。一方で、街に対して自分たちで道を選び取り、使い方、遊び方を獲得していく道草は、ふるまいによって質を持つ原っぱや隅っこを街の中に見つけ出し、自分の場所にしていく行為と言える。つまり道草を行った空間は、虚の道ではなく、子どもにとっては原っぱ、隅っこであり、中間空間であるのだ。その場所は情操や好奇心、想像力の発達など自己形成に深く影響を与え、記憶に残り原風景として子どもたちの中に内在しているはずだ。人々にとって現在の道が意味を持たない虚の空間だという現状があるが、道草のような非合理で一見無意味に思えることへの面白さや価値に気づくことができれば、新たな街の見え方に会えることができる。そのためには目的から目的へ移動する合間が中間空間化され、自己の意識、情緒が反応する場になることが必要である。目的地と道という点と線の街から、中間空間が全体に広がる面の街へと再編することで、人々は街で道草のような体験を行い「原っぱ」や「隅っこ」を見つけ出していくことができるようになる。

### 4 公園

都市は、意味や機能が課されつくり込まれた場所が多く、人々の行為はあらかじめ決められ、限定されてしまう。そんな中、公園は排他性がなく、誰でも明確な目的を持たずに入り気儘に過ごすことができる場所である。つまり公園は本来、都市の中の中間空間と言える場所であるべきだ。しかし、現代の公園は遊び方が決められているなど、目的や意味が必要な場所となってしまう。街の中で「公園」という一つの領域が出来上がり、公園が通りすがりに立ち寄るものではなく、目的地化し、中間空間とは言えない現状があることに問題意識を持つ。

## 5 設計提案

### 1) 敷地

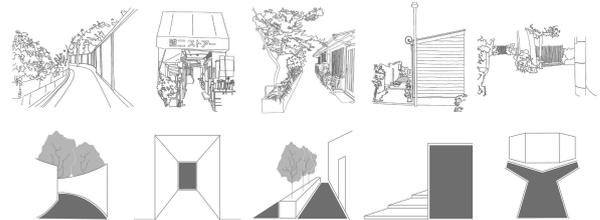
敷地は豊島区雑司が谷に位置する雑司が谷公園である。雑司が谷は池袋副都心の隣に位置しながら、街並みに歴史や文化が残る場所である。しかし、人々は暮らしの中で残っている歴史や文化の情景に接していないながら、それに気づかず何も感じることなく過ごしている。本設計では、雑司が谷を対象敷地とすることで、本来の街の風景が人々の中に顕在化され実感として残ることを期待する。

### 2) 提案

公園と付随する複合施設の設計を行う。現在中間空間となり得ていない公園を、中間空間として設計することで、街に暮らす人々がふるまいと居場所を自ら生み出していく空間を目指す。建築を通して道に帰った時に、訪問者にとって、目的地である建物と道に二分されつつあった街から、中間空間が全体にひろがる街へと変化していく。

### 3) 設計手法

設計を行うにあたって雑司が谷の道を調査し、5つの要素を道から抽出した。様々な高さの塀による人々のふるまいをふまえ、抽出した要素を用いて設計を行うことで雑司が谷の街と建築空間に連続性をうみながら、原っぱや隅っこを織り込む中間空間を作り出す。



- ①道の形が浮かび上がり無限の奥行きを想像させる空間
- ②上部が囲まれて入り口と出口が生まれ、出口の先の世界が見える空間
- ③モノによって境界がつくられた空間
- ④3Dと2Dが対比された空間
- ⑤Y字という選択が迫られる空間

図3 雑司ヶ谷から抽出した5つの要素

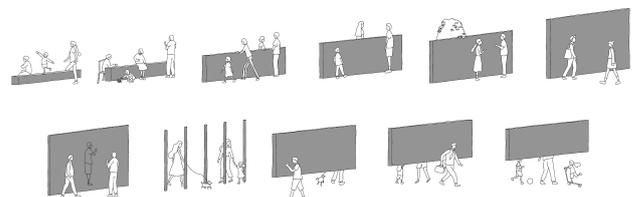


図4 塀でのふるまい

#### 【主要参考文献】

- (1)奥野健男 『文学における原風景』 集英社 1972
- (2)水月昭道 『子どもの道くさ』 東信堂 2006
- (3)仙田満・上岡直見 『子どもが道草できるまちづくり 通学路の交通問題を考える』 学芸出版社 2009
- (4) 南後由和 『ひとり空間の都市論』 ちくま新書 2018
- (5) 横文彦 『見えがくれする都市』 鹿島出版会 1980